

## 第 1 回 県都デザイン懇話会 議事要旨

日 時：平成 24 年 2 月 3 日（金） 14：00～16：05

場 所：福井県国際交流会館 特別会議室

議 題：「県都デザイン戦略」の基本的な考え方について

出席委員：西村座長、国吉委員、五百簾頭委員、八木委員、開発委員、下川委員、  
吉田委員、竹内委員

## 委員からの主な発言内容

## （長期戦略）

- ・ 30 年、40 年経つと、県庁も市役所も周辺の建物も建て替えなければならないことがある。今後も城の中に県庁があっていいのかということ、そう遠くない時期に判断しなければならない。
- ・ 県庁も市役所も今の場所から出ていくとすれば、我々は都心がどうあるべきかを議論しなければならない。また、単純な抽象的なあるべき論だけでなく、実際都心をどうやるのかという大きな方向を議論することが要請されていると思う。
- ・ 建替えの中で、いろいろな形で変化が起こり、うまく再生されるイメージが生まれてくるためのキーワードは何か、何を大事にしていけば良いビジョンが生まれてくるのか、皆さんのインプットで少しずつ先に進めていきたい。
- ・ 最終的には、都市の中心部の将来の大きな方向性に議論を集約する必要がある。
- ・ 横浜は、アーバンデザインを、日本で初めて取り入れた。見て楽しめるまちにして見せ場をつくらないと企業や人も来てくれないという視点で、東京に先んじた。
- ・ ただ美しいだけでなく、経営戦略に呼応した空間としての横浜を考えた。将来、50 年後に造船所をなくすとか、日本大通りをまちの軸にするとか、海が見えるようにする、といったいろいろな目標をつくった。行政・専門家・まちの人が、こうした大きな目標を共有するが細かいところは決め切らずに、少しずつまちの人々と議論しながら一つひとつつくりあげていった。
- ・ 人口動態が一番の問題で、人口が減少していく中で、どう変えていくかを考えていくことが重要である。

## （景観・デザイン・軸）

- ・ 道路の施設などは、通りごとに個別のデザインが出ないように全体のコンセプトを検証すべき。一方、対比的にお堀周辺はシンボリックな別な趣があると良い。
- ・ そこから 駅前に通じる軸の部分は、50 年かかってもよいから考え方をつくってお

いて、ビルの建て替えの時に、例えば3階以上は谷型にしてみようなど工夫ができるとよい。横浜でも、日本大通りでは、ようやく5年前に大きな倉庫がなくなって、港が見える通りになった。

- ・ にぎわいを創出する定義をきちっと軸にしてはどうか。それを踏まえれば、空間演出のスタイルが見えてくる。

#### (本県の特徴・他市町との相乗効果)

- ・ 福井の強みは、すべてが小さくまとまっていて、土地もたくさんあるので「低層階」でいろいろなものが統一できることではないか。
- ・ 「福井はこれ」と決めるなら、やはり「ものづくり」。県都デザイン戦略の中で、ものづくりを見せられたらいい。いろいろな価値を集めて、次の価値をつくり出すような仕掛けがしたい。
- ・ 福井県の悩みであり、魅力でもあるのは、「越前」と「若狭」の個性が異なる地域があるところ。外から来た人間にとっては多様性が魅力である。
- ・ 県都デザイン戦略をやるのが、他の市町にとっても相乗効果があることやモデルになるということを積極的に発信していくことが重要である。

#### (歴史的資源・現代的活用)

- ・ 福井の自慢できる歴史的な事象が、資料の中からも発掘できるかもしれない。それが市民にとって福井のまちを自慢できるようになれば、人が集まり、にぎわいにつながる。
- ・ 市内には古いだけの建物と見過ごしてしまうものもあるが、建築史として価値のある近代の建物がたくさんあるらしい。それらを市民の誇りにつなげていくと良い。
- ・ 素晴らしいお堀があるが、お城の周りに行くようなアクティビティがない。別のアクティビティをつくれれば、他のものが生まれてくるかもしれない。そのようなものをつくってこなかった歴史がある。これから、どう直していくかが課題である。

#### (住民参加・情報発信)

- ・ 県都デザインでは、自分の生活と県都デザインがどう結びつくのか、自分の生活の中に見えるような仕掛けができれば良い。
- ・ 住民にまちづくりにもっと参加してもらうためには、行政や我々がどのような情報の発信の仕方をすべきか検討していく必要があると考えている。
- ・ 歴史、産業、教育、環境、住環境などをうまく情報発信していければ、先が開けてくるのではないかと。